

# 黒ぶだう

宮沢賢治

青空文庫



仔牛が厭あきて頭をぶらぶら振つてゐましたら向ふの丘の上を通りかかった赤あかぎつね狐が風のやうに走つて来ました。

「おい、散歩に出ようぢやないか。僕がこの柵さくを持ちあげてゐるから早くくぐつておしまひ。」

仔牛は云いはれた通りまづ前まへ肢あしを折つて生え出したばかりの角を大事にくぐしそれから後肢をちゞめて首尾よく柵を抜けました。二人は林の方へ行きました。

狐が青ぞらを見ては何べんもタンと舌を鳴らしました。

そして二人は樺林かばの中のベチュラ公爵の別荘の前を通りました。ところが別荘の中はしいんとして煙突からはいつものコルク抜

きのやうな煙も出ず鉄の垣かきが行儀よくみちに影法師を落してゐるだけで中には誰たれも居ないやうでした。

そこで狐がタン、タンと二つ舌を鳴らしてしばらく立ちどまつてから云ひました。

「おい、ちよつとはひつて見ようぢやないか。大丈夫なやうだから。」

こうし  
犢こうしはこはさうに建物を見ながら云ひました。

「あすこの窓に誰かゐるぢやないの。」

「どれ、何だい、びくびくするない。あれは公爵のセロだよ。だまつてついておいで。」

「こはいなあ、僕は。」

「いゝつたら、おまへはぐづだねえ。」

赤狐はさつさと中へ入りました。仔牛も仕方なくついて行きました。ひひらぎの植込みの処ところを通るとき狐の子は又青ぞらを見上げてタンと一つ舌を鳴らしました。仔牛はどきつとしました。

赤狐はわき玄関の扉とのところでちよつとマットに足をふいてそれからさつさと段をあがつて家の中に入りました。仔牛もびくびくしながらその通りしました。

「おい、お前の足はどうしてさうがたがた鳴るんだい。」赤狐は振り返って顔をしかめて仔牛をおどしました。仔牛ははつとして頸くびをちぢめながら、なあに僕は一向家の中へなんど入りたくないんだが、と思ひました。

「この室<sup>へや</sup>へはひつて見よう。おい。誰か居たら遁<sup>に</sup>げ出すんだよ。」  
赤狐は身構へしながら扉をあけました。

「何だい。こゝは書物ばかりだい。面白くないや。」狐は扉をしめながら云ひました。支那<sup>しな</sup>の地理のことを書いた本なら見たいなあと仔牛は思ひましたがもう狐がさつさと廊下を行くもんですから仕方なく又ついて行きました。

「どうしておまへの足はさうがたがた鳴るんだい。第一やかましいや。僕のやうにそつとあるけないのかい。」

狐が又次の室をあけようとしてふり向いて云ひました。

仔牛はどうもうまく行かないといふやうに頭をふりながらまたどこか、なかに僕は人の家の中なんぞ入りたくないんだ、と思ひ

ました。

「何だい、この室へやはきものばかりだい。見つともないや。」

あかぎつね  
赤狐

は扉とをしめて云ひました。

僕はあのいつか公爵の子供

が着て居た赤い上着なら見たいなあと仔牛は思ひましたけれどももう狐がぐんぐん向ふへ行くもんですから仕方なくついて行きました。

狐はだまつて今度は真しんちゆう 鍬くわ のてすりのついた立派なはしごを

のぼりはじめました。どうして狐さんはあゝうまくのぼるんだらうと仔牛は思ひました。

「やかましいねえ、お前の足つたら、何て無器用なんだらう。」

狐はこはい眼めをして指で仔牛をおどしました。

はしご段をのぼりましたら一つの室があけはなしてありました。日が一ぱいに射さして絨じゆうたん緞じゆうたんの花のもやうが燃えるやうに見えました。てかてかした円まる卓テーブルの上になつ白さらな皿さらがあつてその上に立派な二房の黒ぶどうが置いてありました。冷たさうな影法師までちやんと添へてあつたのです。

「さあ、喰べよう。」狐はそれを取つてちよつと嗅かいで検査するやうにしなから云ひました。

「おい、君もやり給たまへ。蜂はちみつ蜜みつの匂におひもするから。」狐は一つぶべろりとなめてつゆばかり吸つて皮と肉とさねは一しよに絨緞の上にはきだしました。

「そばの花の匂もするよ。お食べ。」狐は二つぶ目のきよろきよ

ろした青い肉を吐き出して云ひました。

「いゝだらうか。」僕はたべる筈はずがないんだがと仔牛は思ひながら一つぶ口でとりました。

「いゝともさ。」狐はプツと五つぶめの肉を吐き出しながら云ひました。

仔牛はコツコツコツコツと葡萄ぶどうのたねをかみ砕いてゐました。

「うまいだらう。」狐はもう半ぶんばかり食つてゐました。

「うん、大へん、おいしいよ。」仔牛がコツコツ鳴らしながら答へました。

そのとき下の方で

「ではあれはやっぱりあのまんまにして置きませう。」といふ声

とステツキのカチツと鳴る音がして誰かたれ二三人はしご段をのぼつて来るやうでした。

狐はちよつと眼を円くしてつつ立つて音を聞いてみましたがいきなり残りの葡萄の房を一ぺんにべろりとなめてそれから一つくるつとまはつてバルコンへ飛び出しひらつと外へ下りてしまひました。仔牛はあわてて室の出口の方へ来ました。

「おや、牛の子が来てるよ。迷つて来たんだね。」せいの高い鼻は眼鏡なめがねの公爵が段をあがって来て云ひました。

「おや、誰か葡萄なぞ食つて床へ種子たねをちらしたぞ。」泊りに来て居た友だちのヘルバ伯爵が上着のかくしに手をつつこんで云ひました。

「この牛の仔にリボン結んでやるわ。」伯爵の二番目の女の子がかくしから黄いろのリボンを出しながら云ひました。



# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一卷」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2007年4月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 黒ぶだう

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>